

義援金を競い合う

この3枚続き錦絵は明治24年（1891）10月28日に発生した濃尾地震（M8.0）後、各地から寄せられた義援金の施主と義援高を題材に、面白おかしく、鯨絵漫画に仕立てたものである。なお、義捐の「捐」は助け合うことを意味する漢字だが、現在は「援」の字を当てるのが一般的である。義援金に応じた著名人などを一覧表にしたこの鯨絵は、東京日本橋馬喰町2丁目、澤久治郎が発行した。発行の日付は明治24年11月である。

さて、ここに鯨が登場するのは、いうまでもなく、鯨が地震を起したという逸話をもとに、36年前の安政江戸地震（1855）で流行った地震鯨絵にあやかっただけである。

義援金募集は、新聞が社会的にやや安定し、それぞれの読者層を獲得した明治20年代前後から、新聞社の事業として取り込まれるようになった。たとえば、3年前の明治2年（1888）の磐梯山噴火では東京の新聞社15社が連携して義援金を募集し、災害救援の実を挙げた。濃尾地震の時には、もはや新聞社同士の連携はなく、それぞれが自社の購読者に訴え、中央紙だけでなく、地方紙でも盛んに義援金募集が行われた。この頃には、すでに義援者名、住所、あるいは職業、そして義援金高を紙面に掲載する決まりができていた。

ここで、錦絵をよく見てみよう。まず、上段の義援金高と施主欄の最初に、天皇皇后の2万6千円の恩賜金、続いて各宮家の義援金、華族、関係部署の大臣、役人、県知事、尾張・美濃の旧藩主、各国領事などの顯官貴顕を一覧表の頭に置き、次に銀行、郵船会社などの企業、新聞社、本願寺や日蓮宗、菓子職、人力車夫組合、次いで歌舞伎役者、新吉原の芸妓、茶屋仲間、東京神田・浅草・芝、本郷辺の個人商店主などと並ぶ。東京の義援者が大半で、横浜の義援者が多少入り交じっている程度である。したがって、この情報は、東京で発行された新聞社の義援金募集に応じた人のなかから、編集者の判断で、話題性のある人物を抜書

きしたのではないかと考えられる。当時の新聞は、読者層がそれぞれ異なる。たとえば、顯官貴顕、銀行、会社などは『時事新報』への義援が多いし、芸妓、妓楼などは東京の市井の人々の動向に詳しい『読売新聞』などからの抜書きと推定される。

続いて、下段の首っ引きをしている大鯨、それを応援する小鯨、その周りに配された腕比べ・足比べ、にらめっこ、拳遊びなど、それぞれ上段の義援者が競い合う形で描かれ、義援金を競う一団を滑稽に描いて見せたものである。絵の作者は香朝と署名されている。

まず、地震がどこで起きたのかを美濃と尾張の二匹の大鯨で現し、「うんとゆりだせばこれくれへなこと八なんでもねへ、うたれたもの八愛知愛知」と尾張鯨にいわせ、「どうだ、一ばんおれのちから八えらいものだろう、つぶれたもの八岐阜だ岐阜だ」と美濃鯨が受ける。いずれも愛知＝痛い、岐阜だ＝（つぶされて）ギューに掛けた言葉遊びである。美濃側には、多少の被害のあった伊賀、近江、駿河、伊勢、加賀の小鯨、尾張側には遠江、飛騨、信濃、越前、甲斐の小鯨を配する。ただし、小鯨の諸国のうち越前すなわち福井県は死者100人ほどの被害が出ていて、必ずしも被害が少ないわけではなかった。

さて、義援比べはどうだろう。将棋を競うのは、三井物産（300円）対古河市兵衛（200円）、川上音二郎（50円）対小劇場、医師（100円）対新聞社（11円35銭）、幫間（たいこもち）（5円）対茶屋（100円）、左団次・団十郎・菊五郎（獵師対庄屋対狐の拳遊び）など、必ずしも義援金高の大小ではなく、絵では取り合わせの妙を表している。

濃尾地震ではもはや多くの鯨絵は出現しなかった。むしろ、写真や幻燈によるリアルな災害現場を伝えるメディアに圧倒的人気が集まったからである。

北原 糸子（神奈川大学 非常勤講師）

